
スポーツマン

柊鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スポーツマン

【Nコード】
N0397G

【作者名】
柊鏡

【あらすじ】
壁掛けの有機ELDに野球中継が流れている

壁掛けの有機ELEDに野球中継が流れている。

私はたった百五十キロ程度の球しか投げられない男を見ながら、言った。「巨人に十五万」

私の傍らに座った友人が首を振った。「いやいや、俺は阪神に十五万」

「ははは」私は笑った。実におかしい。「ホームランが年間四十本程度の打者に何ができる？」

「それを云つたら、おまえ——巨人の選手だってそうだろう」
「違うない」

私たちは馬鹿笑いをした。

全く滑稽である。スポーツ選手と云うのは。

「おお、打ったぞ」

逆転さよならホームランであつた。

「くそが」

私は舌打ちをしながら、友人に十五万渡した。

電子マネーでは賭博がバレるので現ナマである。

中継が終わったところで友人が言った。「なんか、野球したくなつたなあ」

「やるかい？」

「二人でか？」

「レンタルすればいいだろう。残りは」

「そつだなあ」

私たちは連れ立って野球場へ行つた。

ロボット工学と情報工学の進展によって数十年前から人間のする仕事はなくなり、一般人は余暇時間が増えた。

一攫千金狙いにスポーツ選手になるヤツもいたが、大抵の人は趣

味でスポーツをする。

余暇時間増大で、昼間っから野球なりゴルフなりをするをする人間が増えた為、今の世の中、そこら中に野球場がある。

家から五分の野球場。

受付を済ませる。

私はバッターボックスに立った。

私以外のナインは受付で借りたロボットである。

マウンドに立つのは友人だ。

彼が振りかぶった。

あつと言う間にボールはキャッチャーミットに吸い込まれた。時速三百キロはでているだろう。

「中々やるな」と私は不敵に笑った。

「ああ。最近、右手を新調したんでねえ」

「私も機械化しようかねえ。いい加減、ドーピングにも限界があるね」

私は三振に終わった。

ベンチへ戻るとき、友人が告げた。「夢は見ないに限るさ」

私は振り返らずに言った。「そうだなあ。ピエロにはなりたくないものなあ」

1930年代、リカンベント式自転車は圧倒的な世界記録を打ち立てた。

その後、使用禁止になったのは言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0397g/>

スポーツマン

2011年2月3日14時32分発行